

平成 27 年度学校評価書

学校名	兵庫教育大学附属小学校
-----	-------------

1 学校教育目標

人間として生きぬく力を育てる

- ・ねばり強く問いつづけ、よりよいものを創り出す子
- ・はげまし、支え合い、共に伸びる子
- ・強い心とたくましい体をつくる子

2 自己評価結果（達成状況）【A：達成している B：概ね達成している C：あまり達成していない D：達成していない】

分野・領域	評価項目（取組内容）	取組達成の状況	評価	改善の方策
教育活動	確かな学力を形成するための取組 ・教育課程の改善や学習指導方法の工夫などにより確かな学力の形成をはかる。	「『子ども一文化一教師』をつなぐ」（3年次）のテーマのもと、年間を通して、前期授業研究会、後期授業研究会、そして研究発表会と、教師は力量を高めながら児童の学力形成に尽力した。さらに一昨年から、CRT検査によって学力の全体的な傾向を把握することで、基礎的基本的な学力を充実する取り組みを続けている。全国学力学習状況調査の結果においても、CRT検査においても学力の分布状況や、学年毎の傾向の差違を明らかにできた。	B	・合理的な配慮を必要とする子どもも多数おり、授業づくりの段階から授業デザインを考えていく。 ・それぞれの学年で押さえるべきことが定着できるよう、補充プリント、補充学習等の機会を増やしていく。
	豊かな心を育むための取組 ・全校縦割りの集団活動や道徳教育などを通して豊かな心を育むことをめざす。	行事や異学年交流を通して、豊かな心を育む取り組みを進めてきた。その中で、多様な個性を持った子どもたちへ対応するために、附小つ子連絡会で、生徒指導上の課題、学校生活面での課題、特別支援面での課題等を交流し、子ども理解への取り組みを強化している。また大学の専門家の協力を得ながらよりよい発達を支援するためにケース会議を継続的に行っている。	B	落ち着いた学習環境を創り出すために学習規律の徹底やどの子にも優しい授業づくりなど、多様な個性を持った子どもたちへの対応できるスキルアップを図る研修の機会を増やす。
	健康な体を培うための取組 ・様々な体験的な活動などを通して健康な体を培うことをめざす。	体育の授業だけでなく、林間、臨海、耐寒訓練マラソン大会等で体力と共に強い意志力を育んだ。食生活だけでなく健康管理も含め家庭での生活習慣を適正に保つために、保護者に対して保健だより、給食だよりによる啓発活動を推進するとともに、学校生活の中での安全意識を高めるために学級指導を繰り返し行った。	B	・基本的な生活習慣の確立のため、「早寝・早起き・朝ご飯」等、家庭への啓発活動を充実する。 ・校内での怪我を防ぐため、安全点検を徹底すると共に、廊下の歩き方等校内での過ごし方の指導を徹底する。
学校運営	組織運営 ・附属学校長がリーダーシップを発揮し、大学・学部と一体となった学校運営を行う。	校長・副校長・教務主任が常に全体を見据えた経営を心掛け、全職員の共通理解のもと教育活動を展開することができた。今年度も昨年度に引き続き職場の労働環境の改善を目指し、会議時間の設定等会議の持ち方等を意識させ、効率化を図り、個々の時間を確保できる取り組みを進めた。	B	・会議時間等の数値化により、時間を意識することにより、効率的な業務運営改善を図る。 ・行事の精選化に向け、研究テーマレベルからの見直し検討を行う。
	教育実習 ・大学の計画に基づき、実習生の資質・能力を高められるような実地教育を行う。	教育大学附属小学校としての教員養成の責務を教員に繰り返し説くと共に、大学からの附属学校園への評価や、教員就職率上位を報道する新聞記事を配布する等して教員の意欲を喚起しながら、教員養成スタンダードにもとづく実地教育の充実を図った。	A	現場での若手教員をめぐる課題等の共通理解を図りながら、指導教員としての問題意識を高めていく。
	大学・附属中学校・附属幼稚園との連携・協力 ・附属学校運営会議のマネジメントのもと、大学・学部と一体となった附属学校園の連携を進める。	従前の附属学校園連携委員会・連携推進協議会に加え、研究発表会参加を教員に呼びかけて、交流の深化に努めた。附属中学校英語の出前授業を実施したり、幼稚園での行事に小学校教員が参加したりするなどして連携を深めた。	B	附属学校園で一貫した子ども観をもとにした教育方針を確立していく必要がある。
	保護者との連携協力 ・学校教育目標の達成をめざし、保護者と学校の連携を進める。	年々、PTAの協力体制のノウハウや引き継ぎが確かなものになってきており、創意工夫のある活動を推進している。ボランティアの父親で構成される「おやじの会」も児童、保護者、教員の関係づくりのために、様々なイベントの企画や校内環境の充実など積極的に尽力してくださっている。保護者の価値観の多様化や家庭環境の複雑化等により、子どもの生活に影響が出てきていることが多くなっている現状があり、子どもだけでなく、保護者や家庭状況へ目を向けさせるなど、教師の問題意識を高めてきた。	B	・教員のPTA活動やおやじの会活動への積極的な参加をすすめる中で、日頃からのコミュニケーションの深化を図る。 ・子どもだけでなく、保護者理解にも努めると共に保護者の意識・ニーズを把握し、教職員間での共通理解を図る。

3 分野・領域ごとの学校関係者評価

学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価
<p>○おおむね適性に自己評価している。</p> <p>○意見を述べる力といった表現力を身につける場合は工夫され身についてきている。表現力だけでなく、基礎学力を身につける補充学習にもより一層工夫して行ってほしい。</p> <p>○学校行事も多いが、行事で伸びることはあり、縦割りの集団でのかわりも貴重な体験であり、行事の持ち方も工夫してよりよいものにして行ってほしい。</p>
<p>○先生方が大変がんばっていただいている。先生方が健康であってこそ、良い教育ができると思うので、先生方の健康管理面にも気をつけて行ってほしい。</p> <p>○研究会、行事等をみても学校と保護者との連携がうまくできている。保護者が子どもとの行事を企画したときなどでも、教員の協力を得やすい。これらの点は大きく評価することができる。</p> <p>○幼・小・中の連携についてはせっかく近くにあるのだから12年間の連続性を考えて工夫して行ってほしい。</p>

分野・領域	評価項目（取組内容）	取組達成の状況	評価	改善の方策
研究活動	大学との研究協力 ・大学教員と附属学校教員が研究テーマを共有し、大学・学部内の人的・物的資源の効率的活用を図る。	各教科等において共同研究を積極的に進めている。研究発表会では、助言者として10名の大学教員に指導を請うことができた。大学からの研究要請を受け対人関係調査等研究協力を行った。インクルーシブ教育システム構築モデル事業では、大学の専門家をアドバイザーとして継続的に招聘し指導を受けた。	A	今後の附属学校園の在り方を検討する場を継続的に設けることが必要である。
	大学との連携体制 ・大学・学部の教員が研究実践の一環として附属学校で授業を担当する。また、附属学校教員が大学・学部の授業を担当する。	大学授業(リフレクション及び学部授業)を附属学校教員が担当した(社会科2名、図工2名、生活1名、体育2名、英語1名)。研究面だけでなく、日々おこる諸問題についても大学との共通理解を図る場を持つようにした。	B	本校の抱える課題等も含め本校の今後の方向性を決め、新たな学校デザインをすすめるためにも大学との共通理解を図りながら、大学と共に検討していく事が必要である。
	全国規模の研究協議会の開催等による地域を越えた普及・啓発 ・附属学校の研究成果について、地域を越えた全国規模の普及・啓発を図る。	研究発表会は、本年度、土曜日1日のみの開催で行った。県外・県内から524名の先生方に参加していただいた。当日は、授業参観、研究協議や出版物を通して、本校の研究成果を広めることができた。午後には、教科別分科会に加え、京都大学大学院教育研究科准教授石井英真氏を迎え講演会を行った。そのほか、地域への本校教育の還元活動として、附小交流会を実施している。今年度は、昨年度より1領域増え、国語、社会、算数他全7教科・1領域(英語活動)で授業公開、研究協議会、実技研修、情報交換会を実施し、地域の学校の研究活動に貢献している。	A	現場のニーズと悩みを把握し、本校の研究の中で現場へ発信する取り組みをすすめる。
	研究開発学校制度等への応募 ・文部科学省等による研究開発指定などを積極的に活用するために、今年度についても積極的な応募を行う。	インクルーシブ教育システム構築モデル事業では、附属幼稚園・中学校と連絡会を持ち情報交換を行ったことには、大きな意義があった。	A	事業の終了後もインクルーシブ教育の取り組みは継続していく。
安全管理等	防災教育 ・実践的な態度や能力を育てる防災教育の推進を行う。	担当教員を中心に計画的に防災訓練を実施し、児童の実践的防災能力を高めた。 1学期：火災、2学期：幼稚園との合同訓練による不審者対応、3学期：地震	A	
	健康・安全教育 ・生命を尊重する健康教育と安全教育の推進を行う。	健康・安全については、栄養教諭、養護教諭を中心に担任の協力を得ながら、それぞれの立場から継続的に指導を行っている。今年度は、特に「いじめ」については、大学の新井先生を招いて研修会を実施するとともに、アンケートをとったり、各学級でケースに応じて指導したりしながら、児童が安心して学校生活をおくれる環境作りに努力した。	B	校内での怪我を防止するために、校内での過ごし方等の指導を徹底する必要がある。
	施設設備 ・児童の学校生活の場にふさわしい施設設備を整える。	遊具及び教室の施設・備品について、定期的に安全点検を行い、適宜補修や危険回避措置を講じた。改修計画を立て具体的な整備を推進している。	A	
	安全管理 ・児童にとって安全・安心な環境を整える。	校内で施錠が必要な場所については施錠の徹底や、危険箇所の把握に努め、修繕等が必要な場合は速やかに行っている。公共の乗り物の使用マナーについては、年々改善が見られているが、表面化しない苦情も少なくない。定期的に、バス停、駅まで教員が同行しながら、指導を継続した。校内で廊下を走っている児童について全校的な指導を行い、安全面への意識化を図った。気象警報発令時の安全な下校のためにメールなどを活用する仕組みを整えた。	B	・委員会等の活動の中で学校での安全な過ごし方等を発信する。 ・校外パトロールを定期的に実施する。

学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価
○今後の国立附属としての学校のありかたについて考える時期にきている。 ○これからの教育について発信していく小学校の役割を果たして欲しい。 ○保護者にも子どもを通して研究の成果がより実感できるようになればという思いもある。
○防災・安全指導等については、学校全体の取り組みを続けて欲しい。 ○登下校のパトロール(公共交通機関利用も含め)を年に何回か保護者にも呼びかけてもいいのではないかと。